

## 都市集住の共同性

—戦後日本における居住形態の変容と〈環境〉・〈家族〉の問い直しとしての集住—

The community of urban collective housing/dwelling

学籍番号 46823  
氏名 鎌田 功 (Kamata, isao)  
指導教官 似田貝 香門 教授

### 研究の背景と目的

現在、都市において集まって住まうことに起因すると考えられる様々な社会問題が起きている。都市固有の匿名的な人間関係は見知らぬ近隣他者への不安として監視社会やゲートド・コミュニティ（要塞都市）を現実化している。地縁や親族ネットワークから離れた養育環境は子育て期に密室でのストレスや虐待として、また単身高齢者の誰にも看取られぬ死いわゆる「孤独死」は震災被害地などにおいて顕在化した。それは都市型社会（現在日本では八割の人間が都市部に生活している）を生きる我々誰もが潜在的に抱える問題である。

そうした社会状況は一言でいえば「共同性の喪失」といえる状況である。かつて戦後もしばらくのうちは、産業構造の過半を占める農業により「農村共同体」は自明のものとして存在した。また高度成長期以降の急速な都市化の中でも、都市における新住民には年功序列と終身雇用にて特徴づけられる日本型経営の「会社共同体」がその受け皿となった。しかし現在、地球規模で流動化する経済領域において、これまで期待できたような共同性の確保をすることは困難を極めていえるだろう。

以上のような背景のなか、本研究においては「住む」こと、とりわけ都市において集まって住むこと＝都市集住を対象として、居住地における共同性再構築の可能性を探る。

なぜ「共同性」創出の可能性に、「集住」をテーマとして選んだか理由を述べておこう。大きく二つある。ひとつ目は、これまでの共同性論の先行研究は概して至高のものとして構想されていたように思う。例えば、約 100 年前の社会学者 E・デュルケムによる「職業共同体」(guild) の構想や、また約 20 年前の哲学者山崎正和による「社交」空間の提案、また一連の家族論は「暖かい家族」に強調符を置く。しかし、現在の社会状況はそうした共同性の至高性を追えるほど悠長ではないところに発生している。より緊迫した生活の中では、むしろ人間存在にとって基底のともいえる最小の共同性こそが切実に必要とされているといえる。労働や社交や家族の現場から離れてもなお（そして超高齢化社会の現在そうした存在は例外ではない）、人が人として生きていくうえで最後まで基底に残る「住む」

という機能を使ってミニマムな共同性を構築することが求められている。理由のふたつ目は、これまで「共同性」というとヒトとヒトとのコミュニケーションの問題に限られて使用されていたことへの批判である。私たちが共同の感情を抱くのは、いま目の前に生きている、ましてや「コミュニケーション能力の高い人」に対してだけに限られたものではない。実際、様々な住まい方をしている人たちから考察すると、そこでは死者である「祖先」や馴染みある「自然」、また自分の思いをこめた「住居」(モノ)を介しての人々の共同など多様を極める。本論では「集住」を対象に考察することで刹那なヒトとヒトの間だけに限らぬ多様な共同性を描き出したい。

## 章構成

本論では、戦後日本における都市居住のあり方を時期的に大きく二つに分けて考察する。前半の第Ⅰ部は敗戦直後から住戸数の絶対的困窮が解決する1970年代の中期頃までを対象にする。ここでは規模の異なる三つの位相——macroとしての都市(第1章)、mezzoとしての住居(第2章)、microとしての家族(第3章)——毎にそれぞれいかなる共同性の原理が存在していたのかを見ていく。この過渡的な時期において住居(=戦後居住を特徴づけるnLDKモデル)とは、都市的規模からはプロセスを共有する一体感によって、また家族の位相からは極小化・個人化しながら「消費」に純化することによって、過渡的に下支えされ成立していたといえる(第4章)。

後半の第Ⅱ部は、1980年代以降、メインの潮流から零れたニーズや欲求にこたえるかたちで自生的に動き出した、住むことをポジティブに転化した新しい集住のかたちを見ていく。在り来たりのプランに飽きたらず自ら自由な設計によって「住居」を問い直す「コーポラティブ住宅」(第5章)の一群。老いを包摂しない戦後核家族の「福祉」の在り方を問い直す「グループ・ホーム(リビング)」(第6章)。地域や歴史との関係を切断し(=ニュータウン開発)、極小の家族による内閉化した「生活」の価値を問い直す「コレクティブハウジング」(第7章)。最後に、はじめに出した問いにこたえるかたちで最小かつ多様な共同性の原理をまとめ、集まって住むことの可能性と条件を挙げたい(第8章)。

## 「nDKモデル」を超えて——「近代」の問い直し——

以上のように戦後居住を時系列的に原理立てて見ていくと、そこには純粋に「近代」の価値が刻印され、追求され、そしてまた矛盾点が露呈し、その原理が弛緩していく様を追従することができる。そして、ポジティブに転化した新しい都市集住とはつまり、そうした近代の価値の問い直しであり乗り越えだといえる。そのことはコレクティブ・ハウジング—北欧を発祥に持ち、「個」の価値を保ったままで(その意味で個の没却を課す他の様々な共同体とは異なる)、日常生活の一部を共同化(多くは週に何度かの夕食の共同運営=コモン・ミール)する住まい方—の代表的な二つの事例から考察できる。ひとつは〈環境〉概念の問い直しとしての世田谷「松蔭コモンズ」における多様な共同性として、ひとつは〈家族〉概念の問い直しとしての日暮里「かんかん森」における最小の共同性としてである。

### ①：世田谷「松蔭コモンズ」——〈環境〉の問い直し——

世田谷における事例「松蔭コモンズ」は、その土地の七代目にあたる地主の鈴木氏に相続税の問題が浮上することに端を発する。氏は「何もかも切り捨てるだけに動いてっちゃうと、生きている意味がなくなっちゃう感じがしたんだよね」と悩み、対応を区に求める中で、環境共生住宅のコーディネートを手掛ける甲斐氏に出会う。ここで二人の捉えるそれぞれ異なる〈環境〉の概念が二軸に交差しコンセプトが固まる。

はじめに、地主さんは環境の改変に対して次のように話す。「この古い家をなくすこと、木を切ってしまうことは過去を切っていくのと同じなわけね。逆にそれらを残すのは過去の人間関係を残すこととよく似ている。よく、森を残すとか自然を残すとかいう言い方をするけど、僕にとっては森や自然より前に“古い時代のもの”という感じがあるかもしれないね。親の代からのものを残すと自然に森やなんかがついてくる感じがする。だから森を残すということはたぶん昔の人と一緒に何かを残していることなのかなあと思うわけ。だからあんなおっきなケヤキがちゃんと残って…縦がつながったなと思うんだね。」…ここで地主さんの考える環境概念とは「時間」軸（＝環境の縦軸）に広がる概念である。それは「履歴」ともいえる。ここでのエコロジー観が「お題目だけの植林」のように上滑りしないのは、それが過去の生きられた他者（＝祖先）との共同として行われているからである。

つぎに、コーディネーターの甲斐氏は自身、マーケティングの専門化としての立場から、現代の都市において環境構築をするとしたら、個の欲求を抑えるかたちではなく徹底させることでしか成功しないと直感し、そのコンセプトを「コミュニティ・ベネフィット」と称し次のように説明する。「コミュニティを目的とするのではなく手段として、個人では実現できない高次元の価値（ベネフィット）を実現させる考え方。あくまでも個人の利益を追求することがコミュニティ・ベネフィットの基本スタンスである。が、結果として得られた利益は環境共生という社会的な価値をも創造しているという点がこのコンセプトの面白いところ。コミュニティをいっしょにつくりましょうというコーポラティブでもなく、自然環境を守りましょうという市民活動でもない。個人の力だけでは実現できない自然環境という実益をもたらしてくれる装置を作り出すための共同事業。」…コーディネーターの考える環境概念とは「空間」軸（＝環境の横軸）に広がる概念である。それは、「コミュニティ」をも創出する。近代における「個」の否定ではなく徹底として、いま生きる他者（＝顔の見える隣人）との共同として行われる。

「松蔭」の事例では、〈環境〉が単に樹木の数を増やす（＝指標化可能なものとしての、結局は形を変えた近代操作主義）ことから、時間軸上における祖先との、空間軸上における固有の隣人との多様な共同性として看取されている。

### ②：日暮里「かんかん森」——〈家族〉の問い直し——

日暮里における事例「かんかん森」は、老人ホームや保育園を兼ねる大規模複合施設の一部として28世帯35人が住む賃貸住宅として2003年に実際に生活がはじまっている。各個人、各家族はそれぞれ独立して生活できる部屋を持ち、その他に共有スペースがあり、そこでは週三日のコモン・ミールが行われている。

本事例における関心はそうした大人数での住まい方が「家族」をいかに定義しているかにある。実際、居住者の方は外部からしばしば「新しい大家族」と称されることに抵抗を覚えるという。そうしたことは幼い子どもでも線引きがあるのだと。おばちゃんと買い物に行くときと母親と行くときとでは態度は違い、また、部屋でわがままを言い甘えん坊であっても、コモンのスペースにでると「シュツ」となるのだという。つまり、ここにはこれまで一枚岩に捉えてきた「共同性」概念が二層に存在しているといえる。それをここでは、〈血縁の共同性〉と〈同居の共同性〉と呼んでおこう。前者はふつう言う家族間での共同性である。それらは絶対的で交換不可能な「純粹さ」、「命がけの」、「一生の」といった強く積極的なイメージで定義づけられる共同性である。後者は対照的に「手段的」、「乗り降り自由」、「その場的」といったようにそれそのものを直接に定義づけようとするとどうしても弱く消極的なイメージで定義づけることしかできない共同性である。しかし、実際の生活者にとってはこうした軽く、風通しのよい「(同居の)共同性」こそが重要だという。例えば、子育て中のお母さんにとっては、泣き止まぬ赤ん坊をコモンのリビングに連れてきて、先輩お母さん方のいい意味でいい加減な「そんなの泣かしとけば大丈夫よ」といった一言がとても支えになると。それは実母（血縁の共同性）からだけでは重厚すぎると、また、全くの赤の他人から言われるということは考えられない。同じ釜の飯を食う顔見知りの、けれども今この場を共有しているということだけで共同する関係が適度なのである。

こうした感覚は皮肉だともいえる。なぜなら私たちの戦後のライフスタイルは一貫して、そうした共同性をその消極性ゆえ、なければならぬものとし外部化してきた。けれども、そうしたことが極限まで行かんとするその時に、まさにその本質的な必要性に気づき、再構築せんとする試みが生まれてくることは興味深い事実である。

最後に、それではそうした〈同居の共同性〉とでも言い得るような最小の共同性構築のための条件を確認しよう。「コモン・ミール」のような集まる手段は最も基本となる。他にも、月に一度ほどの意志決定の場の「定例会」があるが、そこでは多数決は取らないのだという。話し合いが基本になる。しかし結果、ささいな議題に（どのような椅子を買うかというような）、労働の場では考えられないような時間がかかるのだと。けれどもそこではむしろ、決定することを先延ばしするようなプロセスの共有に意味を置いている。また、居住者の方が頻繁に「こだわらない」と述べていたことは印象的である。こうした生活の実相はこれまで「共同性」概念を至高のものとしてしか捉えてこなかった私たちに「最小の共同性」という新しい視点を与えてくれる。

## 今後の課題

以上で考察したような、〈環境〉概念や〈共同性〉概念からは「集住」の場だけに留まらず、新しい時代の社会像が構想可能だろう。とりたて、昨今の「環境問題」解決への道筋として、共同性という視座からのアプローチは、絶対解ではなく個別解による、単一主体ではなく共同主体による、普遍性ではなく関係性による問題解決へわたしたちを促すだろう。